

JAPAN PRIZE NEWS

財団法人 国際科学技術財団

THE SCIENCE AND TECHNOLOGY
FOUNDATION OF JAPAN (JSTF)

〒100 東京都千代田区日比谷公園1番3号

市政会館内

電話03(3508)7691(代)



No.11
1992年7月

1992年(第8回)「日本国際賞」は独、英の2教授が受賞 材料界面、生物生産の科学と技術分野で



ゲルハルト・エルトゥル教授

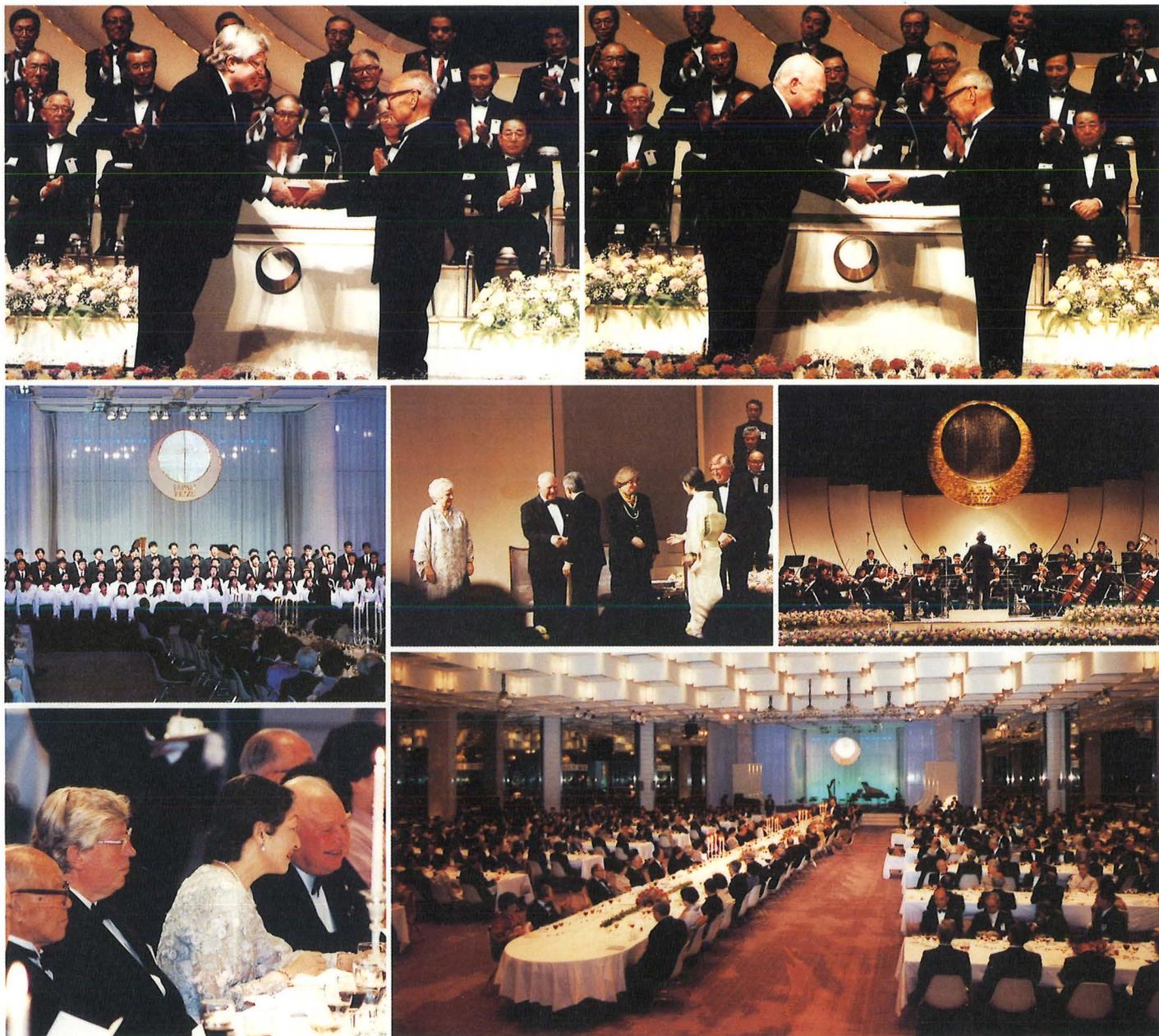
(財)国際科学技術財団が、世界の科学技術の進歩に大きく寄与し、人類の平和と繁栄に著しく貢献した人々を顕彰する1992年(第8回)「日本国際賞」の授賞式が、4月27日(月)、東京・国立劇場で行われました。

今年度の授賞対象分野は「材料界面の科学と技術」と「生物生産の科学と技術」の2分野で、世界各国の学者、研究者からそれぞれ361件、296件、計657件の推薦を受け、この中から独、英の両教授が受賞者に選ばれました。「材料界面の科学と技術」分野では、固体表面の化学ならびに物理の新しい発展に対する寄与の功績により、ベルリン自由大学およびベルリン工科大学教授でマックス・プランク財団フリッツ・ハーバー研究所長のゲルハルト・エルトゥル教授(55歳、ドイツ)が、また、「生物生産の科学と技術」分野では、家畜における精液および胚の凍結保存技術の開発による業績により、イギリス・アニマル・バイオテクノロジー・ケンブリッジ・リミテッド科学・研究担当取締役のアーネスト・ジョン・クリストファー・ボルジ教授(65歳、イギリス)が受賞しました。



アーネスト・ジョン・クリストファー・ボルジ教授

JAPAN PRIZE



天皇皇后両陛下のご臨席を賜り 厳粛に授賞式を挙行政

授賞式は、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り、参議院議長、最高裁判所長官、文部大臣、科学技術庁長官、東京都知事ら官界代表の他に、在日外国大使・公使ならびに財界、著名な学者・研究者、言論界代表等約1,000名が出席し、厳かに挙行政されました。

日本国際賞オリジナル曲「日本国際賞式典序曲—Overture Japan」（三木稔作曲、石丸寛指揮）の演奏で幕開けとなり、伊藤正己財団理事長の開会の辞、近藤次郎審査委員会委員長による審査結果報告および受賞者の紹介、審査委員会各分野部会長の贈賞理由の説明に続き、各分野2教授に日本国際賞の賞状、賞牌および賞金5,000万円が横田喜三郎財団会長より贈られました。

受賞したエルトゥル教授は、「権威ある先生方の審査により

業績を評価していただくことは、全ての努力に対する最大の褒美であると考えます」と感激のスピーチをしました。一方、ボルジ教授も「本賞により科学技術の発展のみならず、人類の平和と繁栄への貢献を評価していただくことの喜びを、私の日本の良き友人たちが私と共に分かち合っていただけのも」と確信いたします」と述べました。

優雅に、そして華麗に春宵の宴 両陛下ご臨席のもと祝宴開かれる

授賞式に引き続き、同日夜、東京・赤坂プリンスホテルにおいて天皇皇后両陛下ご臨席のもと、政府代表、在日独、英大使をはじめとする在日外国大公使および各界名士約500名を招いて、盛大に祝宴が開催されました。

今回の祝宴は、新ヴィヴァルディ合奏団にハーブとピアノの調べを加えた演奏をバックに、「春の饗宴」を演出いたしました。

JAPAN PRIZE

天皇陛下のおことば



第8回日本国際賞の授賞式に当たり、エルトゥル教授、ボルジ教授の受賞を心からお祝いいたします。

エルトゥル教授の御研究は、触媒について、固体表面の原子・分子レベルの解析を行い、その応用に道を開き、また、ボルジ教授の御研究は、動物細胞の凍結保存に端緒を開き、その方法を確立して畜産振興に大きな影響を与えました。このように両教授の御研究は、材料界面の科学と技術の分野並びに生物生産の科学と技術の分野において、それぞれ人類の福祉につながる様々な応用面の発達をもたらすものと考えられます。ここに、両教授の優れた御業績に対し、深く敬意を表します。

世界は、今、人口の増加、環境の保全など世界的課題に当面していますが、このような課題を克服し、人類の平和と繁栄を守るため、科学技術が果たすべき役割には、非常に重大なものがあると思います。

この日本国際賞が、人々に幸福をもたらす科学技術の発展に一層寄与することを願い、式典に寄せる言葉といたします。



横田会長の挨拶で始まった祝宴は、ディナーのあと受賞者両教授の栄誉を讃えて天皇陛下より乾杯のご発声を賜り、続いて三権を代表して長田裕二参議院議長から受賞者夫人の内助の功を讃えて乾杯、花束の贈呈、また谷川寛三科学技術庁長官による日本国際賞のますますの発展と世界平和と繁栄への寄与を祈念して乾杯が行われたほか、鈴木俊一東京都知事、外交団を代表してサウディ・アラビア王国特命全権大使フェウズィー・ビン・アブドル・マジード・ショボクシ閣下から祝辞が述べられました。さらに、受賞者両教授の国を代表して、在日ドイツ連邦共和国特命全権大使ウィルヘルム・ハース閣下、同じく在日英国特命全権大使サー・ジョン・ホワイトヘッド閣下からも特に日本語で祝辞が述べられました。

最後に受賞者両教授がかつて学ばれたカレッジ・ソング等を東京外国語大学混声合唱団「コール・ソレイユ」が合唱、和やかな雰囲気の中、エルトゥル、ボルジ両教授がそれぞれ謝辞を述べられ、華やかな「春の宴」も終宴となりました。

日本国際賞週間

1992年の「日本国際賞週間」は、4月22日（水）から4月30日（木）までの8日間で、この間、国際科学技術財団は授賞式・祝宴のほか、内閣総理大臣表敬訪問や東京および大阪で記念講演会を開催するなど各種行事を行いました。



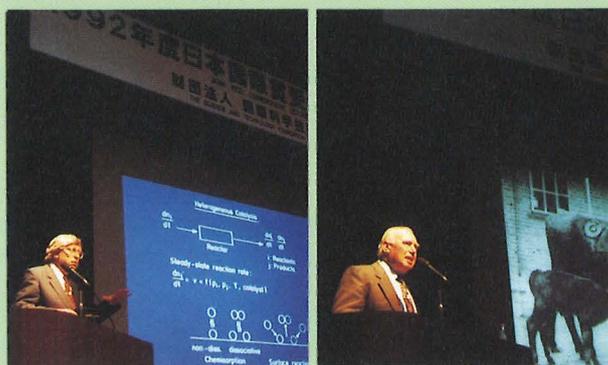
内閣総理大臣表敬訪問（4月23日）



受賞者合同記者会見（4月22日於日本プレスセンター）



日本学術会議会長表敬訪問（4月22日）



東京での記念講演会（4月24日、ニッショーホール）

ストックホルム国際青年科学セミナーへ 2学生を派遣 90周年ノーベル賞行事にも参加

国際科学技術財団は、ノーベル財団と密接な関係を維持しており、同財団の後援により毎年ノーベル賞週間にストックホルムで開催される「ストックホルム国際青年科学セミナー」へ2名の学生を派遣しています。昨年度第16回同セミナーには上智大学理工学部化学科の井上敦子さんと東京農工大学農学部林学科の大江志津子さんが派遣されました。二人は90周年記念ノーベル賞授賞式やレセプションにも参加しました。

■井上敦子（上智大学理工学部化学科）

授賞式の前日（12月9日）に、ヴァーサ博物館にてノーベル賞レセプションが行われ、過去の受賞者がきら星のごとく参加し、親しくお話する機会を得ました。

博物館の中には、わずか1回の航海で沈んでしまった大きな木造船ヴァーサ号が置いてあり、ヴァイキングの雰囲気を感じさせています。その周りの広いフロアで世界中の人々が受賞者達を囲んで談笑していました。

私も何人かの受賞者とお話できて、中でも1990年ノーベル化学賞を受賞され、日本国際賞受賞者でもあるコーリー博士には、日本の印象や、アメリカと日本の学生の違いについてもお尋ねしました。受賞者の方々には奥様を見失って一生懸命探していらした方もいらしたのが印象的でした。

参加者達は民族衣装をお召しの方がかなりいて、めずらしい衣装について聞くこともでき、会話がはずみました。ノーベル賞という世界的に最も重みのある賞のもとに人々が集い、人々の輪が広がっていきます。普段なかなかお会いできない方々にアルフレッド・ノーベル氏がひきあわせて下さったのだらうと、レセプションに参加して思いました。



ストックホルムにて、井上さん(左)と大江さん

■大江志津子（東京農工大学農学部林学科）

宿泊先のホテルまでリムジンがむかえに来た。振袖を着るのは時間がかるので、私たちは一番初めに着換え始めたのだが、車に乗ったのは最後であった。

今年は、90回目のノーベル賞授賞式典であるので、過去の受賞者全員が招待されていた。そのため、例年式典が催されていた市庁舎では手狭となり、より規模の大きいグローベンとよばれるコンベンション・ホールで催されることとなっていた。

会場のホールは正装の男女であふれていた。その半分以上が学生であったのは驚きであった。彼らは共通の白い帽子を身につけているので、一目で、そうとわかった。ある意味では、その帽子はタキシードやイブニングドレスとはアンバランスであった。しかし、彼らがそれに誇りを持っているのは、はっきり見て取れた。

式典は1901年の第一回目から演奏されつづけている「スウェーディッシュ・フェスティバル・ミュージック」をバックに、過去の受賞者の入場が始まった。100数名の入場者の中には、かなり年を召した方や車イスで入ってくる方もいて、私はノーベル賞という一つの国際賞の歴史の重みを実感した。

それからは音楽とスピーチの連続であった。私は、そのすべてに圧倒されつづけた。この世界有数の科学者達の式典に出席したことを私は決して忘れないだろう。

1993年(第9回)「日本国際賞」 の受賞者審査開始

1993年(第9回)「日本国際賞」の授賞対象分野は「安全・防災」と「医学における細胞・分子生物技術」の2分野です。すでに世界各国から多くの受賞候補者推薦状が寄せられており、現在、国際科学技術財団に設置された日本国際賞審査委員会によって審査が行われています。受賞者の発表は本年12月、授賞式は来年4月を予定しています。

「やさしい科学技術セミナー」 毎月開催

国際科学技術財団は日本国際賞の顕彰の他に、科学技術に関する知識や思想の普及・啓発を図るため、内外の著名な先生をお招きして、毎月（原則として第4水曜日、於：星陵会館、千代田区永田町2-16-2、電話03-3581-5650）講演会を開催しています。

科学技術のさまざまな分野にわたり、タイムリーなテーマを、わかりやすくお話しいただいております。平成4年度の年間シリーズ・テーマは「自然環境及び生命のふしぎ—あらためて考えてみる、科学の原点」で、11月までの予定は次のとおりです。

講 師	予定テーマ	開催月日
東京大学農学部教授 會田 勝美	魚の産卵 —魚たちによる命への飽くなき営み	7.29(水)
筑波大学生物科学系教授 柳沢嘉一郎	遺伝子のなぞ —生命根源に宿る「定め」を解く	8.26(水)
国立極地研究所教授 神沼 克伊	地球内部のなぞ —足もとの深奥をさぐる	9.24(木)
東京工業大学生命理工学部教授 掘越 弘毅	極限環境下での生きモノ —生きることの驚異	10.28(水)
京都大学理学部教授 佐藤 文隆	ビッグバン —宇宙誕生を追って	11.25(水)

